

興行分析 11月度レポート

◆————◆
< 2011年12月12日 >

10月末公開の「ステキな金縛り」の大ヒットに支えられ、
6月以来、今年2回目の興収前年超えを記録

KRI 

キネマ旬報映画総合研究所

興行分析 11月度レポート

【首都圏ロードショー館の前年同月比は、動員102.3%、興収106.1%】

11月の興行は、東京ロードショー劇場78館の集計では、総動員数が66万453人、総興収が8億8662万円となり、前年同月（81館）比で動員数102.3%、興収106.1%と、興収では6月以来、今年2回目の前年超えとなった。最も大きな要因は、前月29日封切の「ステキな金縛り」（東宝）の大ヒット。アニメを除く実写邦画では、3月12日公開の「SP 革命篇」以来の30億円超えとなり、11月末時点で今年の邦画No.1興収である「コクリコ坂から」（東宝、最終45億円見込み）に迫る40億円超えを視野に、現在も動員を伸ばし続けている。同作の興収の内、30億円近くがこの11月度集計となり、結果、前年同月超えを達成した。

【「カイジ2～」スタートダッシュも途中失速で最終20億円届かず! ?】

11月は初週に「カイジ2 人生奪回ゲーム」（東宝）が登場。316スクリーンで公開され、初日2日間で動員26万429人、興収3億4967万円と大ヒットスタートを切った。前作「カイジ 人生逆転ゲーム」（東宝、09年、最終興収22億5000万円）が、初日2日間で動員27万4846人、興収3億6362万円であり、本作も20億円を見込む興行が期待されたが、3週目以降で失速。「映画怪物くん」（東宝）に押されるかたちで動員を落としていき、20億円超えは難しい状況に。東宝は、秋以降、「アンフェア the answer」「モテキ」「ステキな金縛り」と20億円超えが続き、持ち直してきたかに見えたが、「カイジ2～」の途中失速を見ると、やはり、昨年までの邦画好調期からするとまだ完全復調とは言い切れないかもしれない。

同週には、「パラノーマル・アクティビティ3」（パラマウント）が11月1日（映画の日）を初日とした変則スタートで169スクリーンで公開。6日間で動員9万2994人、興収1億1743万円は公開規模からするとまずまずの成績。また、東映が24年ぶりに外国映画の買い付け・配給事業を再開し、立ち上げた新レーベル「東映トライアングル」の第2弾、ジャッキー・チェンの映画出演100作記念となる「1911」も同週公開となったが、287スクリーンを開けながら、初日2日間の動員が4万4418人、興収5211万円ともの足りない結果に。

【洋画の第2、第3グループに動員伸びず、20億、10億に壁】

2週目には、ブラッド・ピット主演の「マネーボール」（ソニー）、「300〈スリーハンドレッド〉」の製作スタッフによるスペクタクル「インモータルズ ー神々の戦いー」（東宝東和）と洋画の話題作が封切られた。前者は東京国際映画祭のクロージング作品で、公開直前にはブラッド・ピットも来日して話題を集めたが、結果は、329スクリーン公開で初日3日間の動員14万1727人、興収1億8098万円と伸び切らず、久々のドラマ性の高い見応えのある話題作だったが、最終10億円にどこまで迫れるか、という状況にある。後者は、「300〜」（WB、07年、最終興収15億6000万円）同様に映像に凝ったスペクタクルで、「300〜」並みのヒットを期待して462スクリーンで公開。結果は、初日3日間動員9万2701人、興収1億2976万円とこちらも厳しい結果となった。また、スティーブン・ソダーバーグ監督の感染スリラー「コンテイジョン」（WB）も同週公開だったが、240スクリーン公開で、初日2日間動員5万8832人、興収7757万円と、豪華スター競演ながら生彩を欠く。洋画も「ハリー・ポッター」「パイレーツ・オブ・カリビアン」クラスのフランチャイズを除けば、第2、第3グループに位置する作品群が、興収20億円、10億円とそれぞれに

壁を超えることが難しい状況が続いている。

【「アントキノイノチ」も不発、松竹の復調に期待】

3週目には、松竹が「アントキノイノチ」を公開したが、230スクリーンで初日2日間の動員が7万4280人、興収が9357万円と、最終5億円が難しい状況。近年の同傾向作は、「解夏」(04年、最終興収10億9000万円)、「涙そうそう」(06年、31億円)、「恋空」(07年、39億円)、「余命1ヶ月の花嫁」(09年、31億5000万円)と邦画の隆盛とともに興収を伸ばしてきたが、本作はそうした時代の希求から期を逸したのか、震災による視聴者マインドの変化からか、それとも作品の魅力に差があるのか、いずれにせよ、期待された数字を大きく下回る。松竹は「セカンド・バージン」「一命」と低調が続くが、全体の市況回復のためにも同社の復調に期待したい。

【意味ある3D映画で、ファミリーイベント化した「映画 怪物くん」】

そして最終週には、「映画 怪物くん」が登場。嵐の大野智主演でテレビドラマ版が人気を博すとともに評価も高く、また、手足が伸びる設定などで3D化にも意味のあるファミリー・イベントムービーとして絶好のスタートを切った。2D、3Dの公開でスクリーン数は446と多いが、初日2日間の動員43万1093人、興収5億8103万円は、「ステキな金縛り」に続き最終興収40億円を見込む好況。また、初日2日間での3D：2D比率は、興収比で74.3：25.7となり、昨年のような動員に与える“3D効果”が期待できなくなってきたなかで、3D映画らしいイベント感で市場を盛り上げている。

【ミニシアターで意欲作、ドキュメンタリーが好況】

また、ミニシアターでは、2週目に小規模公開で臨んだ園子温監督「恋の罪」(日活)が好調。19スクリーンで公開され、初日2日間で動員8383人、興収1269万円、パー・スクリーン66万円は、見事なスマッシュヒットと言えるだろう。ほか、10月1日の公開からじわじわと動員を伸ばしてきた「エンディングノート」(ビターズ・エンド)が、封切り2ヵ月を過ぎても落ちることなく好調な興行を続けている。本作は砂田麻美監督が末期がんの自分の父親を追ったドキュメンタリーだが、わずか12スクリーンでの公開から始まり、現在100スクリーンまで興行を広げ、興収も1億円を見込む。もともとが商業目的で制作されたのではない本作が期せずしてこれほどのヒットとなった背景には、震災後の視聴者の嗜好性の変化も大きく影響しているだろう。ミニシアター興行のひとつの在り方として、改めてドキュメンタリー映画の人を動かす力に注目したい。